

第17冊・第40回（番外編）

『仏教抹殺』

～なぜ明治維新は寺院を破壊したのか～

鵜飼秀徳、文春新書

神社合祀

明治新政府は「神仏分離」や「廃仏毀釈」によって仏教を破壊しました。そのことで、1000年以上も続いてきた「神仏習合」という日本の伝統をも破壊しました。「日本人の心が壊れてしまった」という人もいます。

それとは逆に、長い間仏教勢力によって貶（おとし）められ蔑（さげす）まれてきた神道勢力は明治初期に息を吹き返しました。神道を国教化するという明治新政府の野望を遂げられませんでした。神道の勢力が江戸時代とは全く異なる「良い」状況になっていきました。

ところが、明治末期、日露戦争後あたりから、神道勢力にとって思ってもみない事態が発生します。「**神社合祀（ごうし）**」という名前のもとに、日本各地の神社が「破壊」されていったのです。明治初期の廃仏毀釈で多くの寺院が廃絶され多くの文化財を失いましたが、今度は明治の末期に多くの神社が「神社合祀」政策により破壊されていったのです。

しかも、「神仏分離」は日本が西欧列強諸国に追いつくため、という言い訳ができる要素がありましたが、「神社合祀」の実態はたくさんの森を破壊しただけではなく、特定の人物の私腹を肥やすものでした。

南方熊楠のような人物が登場して鎮守の森の大量破壊をなんとか止めようとしていましたが、三重県では神社の9割が無くなりました。和歌山県や愛媛県でもそれに匹敵するような「神社破壊」や「鎮守の森の破壊」が起こります。

神社合祀はなぜ起きた？

「神仏分離」にしても「廃仏毀釈」にしても、山川出版社の教科書や帝国書院の資料集などにちゃんと載せてあり、説明もあります。でも、「神社合祀」については全く載せられていません。私自身もほとんど知りませんでした。読者のあなたもひょっとして「初耳」かもしれません。

そこで、[歴史逍遙『しばやんの日々』 - 明治末期に政府が推進した神社合祀と鎮守の森の大量破壊〜神社合祀1 \(shibayan1954.com\)](https://shibayan1954.com/history/meiji/jinja-goushi/goushi-1/)

<https://shibayan1954.com/history/meiji/jinja-goushi/goushi-1/>

を参考に、明治末期に起きた「神社合祀」について学んでいきましょう。

そもそも、神社合祀とは何でしょうか？「[ウィキペディア](#)」によりますと、

神社合祀政策は1906年(明治39年)の第1次西園寺内閣において、**内務大臣・原敬**によって出された勅令によって進められ、当初は地域の実情に合わせかなりの幅を持たせたものであった。だが、第2次桂内閣の**内務大臣平田東助**がこの訓令を強固に押し進めることを厳命したため、**全国で1914年までに約20万社あった神社の7万社が取り壊された**。特に合祀政策が甚だしかったのは**三重県で、県下全神社のおよそ9割が廃されることとなった**。和歌山県や愛媛県もそれについて合祀政策が進められた。しかし、この政策を進めるのは知事の裁量に任されたため、その実行の程度は地域差が出るものとなり、**京都府では1割程度ですんだ**。

『しばやんの日々』では、

明治初期の廃仏毀釈では全国の半分近くの寺が廃絶されたが、**明治末期には神社合祀政策で、全国の神社の3分の1以上が無くなった**というのも極めて異常な話である。ところが明治政府によってこのような破壊行為が行われたことは通史にはどこにも記されていないのである。

と述べ、さらに**神社合祀政策の根拠となった勅令**を紹介しています。明治39（1906）年8月10日勅令第220「**神社寺院仏堂合併跡地ノ讓与ニ関スル件**」という名前の法令です。

神社寺院仏堂ノ合併ニ由リ不用ニ歸シタル境内官有地ハ官有財産管理上必要ノモノヲ除クノ外内務大臣ニ於テ之ヲ其ノ合併シタル神社寺院仏堂ニ讓与スルコトヲ得

この勅令が「神社合祀」のはじめとなります。以前、物事には「はじめ」と「終わり」があると書きましたが、神社合祀の「はじめ」が「神社寺院仏堂合併跡地ノ讓与ニ関スル

件」という勅令なんです。

ただ、この勅令のどこにも「神社合祀を推進せよ」とは書かれていないですね。法令の内容が抽象的すぎると、権力を掌握している人にとってはやりやすくなります。どのようにも解釈できるので、権力者、その取り巻きの人々、さらに利害関係者にとっては「美味しい」ことができます。

で、この場合の権力者は「内務大臣」ですね。

この条文に関して言えば、政府が寺社の合併を推進すれば、「不用二帰シタル境内官有地」が増加することとなって、「内務大臣がその処分権を持つ」とも読めます。

原敬内務大臣は「あこぎ」なことをしなかったようですが、そのあとの第2次桂内閣の内務大臣平田東助は、この勅令を根拠として、氏子崇敬者の意向を無視して神社合祀を強引に進めていきました。

神社合祀の目的は何か？

『しばやんの日々』では、「何のために神社合祀が進められたのか」ということに関して、当時の新聞や『新聞集成明治編年史 第十三巻』などいろいろ調査をされ、次のように述べておられます。

この記事によると氏子も神主もいないような神社や、檀家や住職もいないような寺の合併を奨励して「維持の財源に供せしめる方針」などと書かれている。しかしこの説明では、全国で三割以上の神社が急激に減少した理由としては説得力がなさすぎる。実際のところ、氏子も宮司も多数存在したような神社までこの時期に破壊されているのである。・・・

さらに『しばやんの日々』さんが見つけた『地方自治の手引き』という書物から次のような結論を導きます。

ちなみに、この本の題字を書いたのが神社合祀を進めた当事者の内務大臣平田東助です。実際の著者は前田宇治郎という内務省地方局員でした。ただ、この書物が出版されたのは明治44年（1911年）なので、急激な合祀が反対運動により下火となった頃に出版された書物なんだそうです。そこには次のように書かれています。

町村内に幾多の神社が存在する場合には勢い祭事も個々別々に行われるので、氏子の負担もまた重くなる割合である。されば神社の合併ということは必要であるが、然し之を実行せんとするに於ては、旧来の慣習がありて、頗る困難の場合が多い。合併すれば祭事も一に帰し、祭事が一に帰すれば、廳(やが)て町村民の経済上の利便となるは、言うを要せず。第一神社の尊厳ということが保たれて来るのみならず、合併された神社の境内地などは、又新たなる神社の基本財産とすることが出来るから、神社維持の上に於いても大いに便利である。三十九年より四十二年末に至る迄に、府県社、郷社、村社、無格社の数が、実に四万五千も減っている。

この文章を読めば、神社合祀を推進した政府関係者は、神社の数が少ない方が合理的で、経済利便性が高いという「単純な」考え方から神社合祀の推進を立案したようです。

小さな村に神社がいくつもあれば、氏子たちの負担も大きくなるし、神社を1つにまとめれば氏子たちの経済的負担や祭りなどでの物理的負担も軽くなる、と表向けの理由を述べています。

「神社合祀」の目的は、氏子など村人の負担を軽くすることが主眼だったようですが、本当でしょうか？

『しばやんの日々』さんがさらに調べていくと、東京帝国大学農科大学（現・東京大学農学部）教授の白井光太郎氏の論文（「神社合併による農村の破壊」、大正2年5月 農業世界第八巻第六号）を見つけます。

白井教授は、明治39年の勅令が、神社の破壊に至った経緯と和歌山県の事例についてこう述べている、と紹介しています。

三十九年原内相の下に水野氏神社局長で出された合祀の訓令では、…其本意は八兵衛稻荷とか遊女の高尾大明神とか助六天神の様な埒もない、凡俗衆が一時の迷信から立てた淫祠小社を駆除するの目的と解釈されたが、其後平田内相の時、前の訓令を改修して神社を潰すことに定め、金銭を標準として神社を淘汰するようになり、其処分は知事に一任し知事は之を郡長に、郡長は之を村吏に一任するという遣り方であるから、之等知識のない吏員等は得たり賢しと神狩を始め、何時からか、一村一社とか三千元乃至五千元という大金を基本財産と定むる規定を設け、これに合格せざる社は一切掃蕩に及びるので、如何なる由緒、如何なる立派な社殿神林神社も此等の攻道具には困って、泣きの涙で県知事の命令通り一村一社の制を用い、指定社外の諸社を悉く伐木し地所を公売して指定の一定の財産として神官神職の俸給を出すこととなった。之が為め紀州などでは人民の一番純朴な有田郡は一村一社の外の諸社は悉く掃蕩され、日高郡之に次ぎ、現今一村一社の外に残りあるは三社のみと聞いたが、兎に角この辺は半原低地で昔から田園早く開けた地であるから、土地の植物を視察するには神社より外にないのに、この神社が潰され神林が悉く伐られたので、有田郡日高郡の植物は今日之を研究する利便を失ってしまった。

和歌山県だけではなく、ひどい破壊が全国各地で行われたようです。同書には次のような事例も記されており、官吏がどんな言い訳をしていたかも併せて記されているとのこと。

神社合併が史跡を滅却した例は、奈良県下では武内宿禰の墓を滅却し、大阪府下では敏達帝の行宮跡を滅し、又東京農科大学付近では植物採集地で有名な大宮八幡の森がなくなり、又十三塚の遺跡として農科大学裏門付近の三角という所の縦の大木の下に塚があったのも何時の間にか木は伐られて畑となってしまっているの、全国に斯る例は随分あることであろう。

而して此合併に対する言い草が面白い。稲荷は狐で神ではない。八幡宮に合併して神殿を毀っても祟りはない。山上は魍魎であるから斯る迷信的のものは破壊せねばならぬというのである。

役人たちは、ただ神社を合祀しただけでなかったのです。御神体のなくなった神社の建物や境内の森林を破壊したのです。

ただ合祀することが目的であるならば、社叢（しゃそう＝神社において社殿や神社境内を囲うように密生してる林）を破壊する必要はなかったはず。なぜ、彼らは神社の自然環境破壊にそれほど熱心だったのでしょうか？不思議です。ホントの目的は何だったのでしょうか？

白井光太郎氏は同書で次のようにその事情を記しているそうです。

試しに我が農科大学付近に於ける神社合併の事情を探ってみるに、荏原郡世田ヶ谷村、大崎村、目黒村等は率先して合併を実行した様であるが、**其神林を公売し社地を売買する手続きに随分いかがわしい風聞があるので、例えば一坪十五円に売る地面を登記面には十円としてその差額は公官吏世話人らの手数料酒肴等になりしとのことである。**神木を売却する時も同様土地の人民は神木に恐れを懐き、手を出す者が無いのを幸いに、他所から買人を伴い来て、**好い加減の値段を付け、其間に不正の手段に依り多額の金銭を着服するものである。**之は全国一般に於ける合祀熱の熾（さか）んな真原因で、其金は村民の有ともならず、神社の基本ともならず、一部の奸譎の徒の私腹を肥やすにすぎぬとは驚くべきではないか。上の好む所下之より甚だしということがあるが、実に意外千万のことである。是程迄も弊害のあることを当局者から何とも処分しないと頗る怪訝に堪えない次第で、改めざるを得ないことである。

なんですと！神社合祀のホントの目的は、「一部の奸譎（かんげつ＝心がねじけていて、いつわりの多いこと）の徒の私腹を肥やすにすぎ」ないというのです。**神社を破壊したのは、役人たちが「私腹を肥やす」のが目的だった**のです。

ホントなんですか？『しばやんの日々』さんは、「すくなくとも、庶民の大半は破壊の原因をそのように考えていたのではなかったか」と述べています。

クスノキと平田東助の関係

明治時代に限らず、いつの時代にも素晴らしい人、優れた人、立派な人がいます。一方、無能な人、自分の出世しか考えないひどい人がいます。

『しばやんの日々』さんは、神社合祀を推進した平田東助について「悪い噂が多い人物であることは少し調べればわかる」というので、私も「ウィキペディア」を読みました。確かに、あまり良いことが書いてないですね。ただし、現在のPanasonicと関係が深いというのにはびっくりしました。



平田東助（「ウィキペディア」より）

さらに「しばやん」さんは、ホームページ園田義明氏の『隠されたクスノキと楠木正成』
<https://www.asahi-net.or.jp/~vb7y-td/L0/200516.htm>
の記事を紹介しながら、次のように記しています。

「神社合祀は樟脳専売事業と大きく関係し、その両方を推し進めた当事者こそが平田東助だった」と書かれている。平田東助は明治三十五年(1901年)第一次桂内閣では農省務大臣として入閣し、明治三十六年(1902年)に内台共通樟脳専売法案を提案可決させ、第二次桂内閣の時に内務大臣として神社合祀を強引に進めた当事者なのである。

当時樟脳はセルロイドの原料として使われ、映画や写真のフィルムの材料としても使われていて、わが国は樟脳の世界需要の7~8割を生産していた。今では合成樟脳で間に合うのだが、昔は樟脳を生産するにはクスノキが原料として必要であった。ところがクスノキの乱伐の影響で、明治の末期には樟脳価格が高騰していたために、手つかずのままのクスノキの大木が数多く残されていた三重県や和歌山県の鎮守の森が明治末期に狙われたというのである。

当時のデータで検証することが困難なので断言することは出来ないが、確かにこういうことがなければ、両県の神社の鎮守の森の多くがわずか数年で失われてしまったことの説明がつかないであろう。売られたのはクスノキだけではないのだが、和歌山の鎮守の森の樹木が高値で売り払われたことは確実なのである。

うーん、そうだったのか！樟脳は防虫剤に使われているとは知っていましたが、なんと映画や写真のフィルムの材料だったのですか！知らなかった！！

大正時代には映画が庶民の楽しみの1つになりますが、映画や写真のフィルムに樟脳が関わっていたんですね。

そして、「樟脳で儲けよう」と考えた人たちが、日本や台湾などで樟脳を「確保」しましたが、日本国内で品薄になってしまったため、樟（クスノキ）が残されている神社近くの鎮守の森から樟を大量に伐採し、儲けようとしたというのです。

神社合祀の目的は「金儲け」だった、というのはにわかには信じられませんが、そうやって私腹を肥やした人物がいたのは間違いのないようですね。

これは廃仏毀釈でも、寺院の建物や釣鐘などから金属を取りだして儲けようとした人がいました。同じことなのでしょうか？

そして、**園田義明氏は『隠されたクスノキと楠木正成』**のなかで、次のように記しています。

(この数字をもとに計算すると、) 明治四十三年の時点で三重県は神社合祀により全体の85.5%が滅却され、和歌山県は78.7%、愛媛県は62.3%、埼玉県は60.7%、長野県は43.9%の神社が破壊されていたことになる。

同書によると、神社合祀に熱心でなかった都道府県もいくつかあり、秋田県、青森県は昨年六月までに僅か四社を滅却しただけで、北海道も全道で十四社が減少しただけだという。

ここで質問があります。今、私は「台湾などで樟脳を『確保』」と書きました。では、大正時代に樟脳、砂糖貿易商として世界的な拠点網を確立するとともに、製糖・製粉・製鋼・タバコ・ビールなどの事業を展開し、三菱や三井などの財閥に匹敵する巨大企業に成長した会社といえは何でしょうか？

鈴木商店ですね。「スエズ運河を通る船舶の10隻のうち1隻は鈴木商店関係の船」といわれるくらいに巨大な企業でした。

その鈴木商店が倒産し、台湾銀行も倒壊寸前までいったのが1927年に起きた「**金融恐慌**」でした。この時の内閣は何でしたか。

第1次若槻礼次郎内閣でした。

また、大蔵大臣の失言がきっかけでパニックが発生しましたが、大蔵大臣は誰でしたか？さらに、どのようなパニックに陥ったのでしょうか？

大蔵大臣は片岡直温（なおはる）、そして「取り付け騒ぎ」が発生しました。

この時、軍部・枢密院などは台湾銀行を救うための勅令案に反対しましたが、その目的は何でしたか？

「協調外交」を推進する幣原喜重郎外務大臣を更迭するのが目的だった、と言われてますね。

仏像を破壊から救った人

長い間、鶴飼秀徳氏の『**仏教抹殺**』から、「神仏分離」や「廃仏毀釈」、さらに「神仏習合」について書いてきました。

最後に、「これを触れておかないとあかんやろ」と思うのが、廃仏毀釈の嵐が吹き荒れていた頃、たくさんの仏像が壊されたり燃やされたりしていた頃、その窮地から仏像を救い出し、今私たちが国宝や重要文化財として寺院や美術館などで仏像に出会うことができるようにしてくれた人たちがいた、ということです。

その人の名前は**岡倉天心**と**フェノロサ**です。すこしだけ、彼らのことについて記させてもらいます。なぜなら、彼らがいなかったら、阿修羅像などを目にすることもできなかったかもしれないからです。

筆を持たない芸術家：岡倉天心

まずは、岡倉天心（本名は岡倉覚三）についてです。欧米人から劣等国とみなされていた日本のイメージを払拭すべく、茶道の解説を通じて日本人の精神性の高さや美意識を訴えたのが岡倉天心です。『ウィキペディア』の記事を参考にまとめていきます。

岡倉天心といえば、真っ先に思い出すのは彼がアメリカに行った時の逸話です。

1903（明治36）年、天心はアメリカのボストン美術館からの招聘を受け、**横山大観**（たいかん）、**菱田春草**（しゅんそう）らの弟子を伴って渡米しました。羽織・袴姿で、一行が街の中を闊歩していた際に、1人の若いアメリカ人から冷やかし半分の声をかけられます。

What sort of nese are you people? Are you Chinese, or Japanese, or Javanese?

「おまえたちは何ニーズ？ チャイニーズ？ ジャパニーズ？ それともジャワニーズ？」

そう言われた天心は

We are Japanese gentlemen. But what kind of key are you? Are you a Yankee, or a donkey, or a monkey?

「我々は日本の紳士だ、あんたこそ何キーか？ ヤンキーか？ ドンキー（ロバ）か？ モン

キーか?」

と英語で言い返したというのです。この切り返し・リアクションはすごい。天心はカッコいいですね。機転が利きますよね。英語もペラペラなんですね。できすぎた話なので、随分と脚色があるのではないかと思います、胸がスッとします。



写真は「ウィキペディア」より

※天心が普段着ていたのは和服です。
しかも、奈良時代の官吏（役人）の服を模したもので、天心にとって衣服とは心身を包むだけのものではなく、むしろ魂の表象でした。

なぜ、英語がペラペラだったのででしょうか？岡倉天心の業績を見ておきましょう。

彼は、福井藩士の次男として横浜で生まれ育ちました。当時の横浜は今のような大都会ではありませんでしたが、欧米に向かって開かれた窓といってもよい場所でした。7歳の天心は横浜の居留地の宣教師ジェームズ・バラが開いた英語塾などで英語を教わっています。だから英語がペラペラなんですね。英語が話せるだけでなく、横浜や英語から「世界を見る眼」を養っていったようです。

母が亡くなった後、再婚した父の都合で神奈川の長延寺に預けられ、そこで漢籍を学び夢中になったといえます。

そして、なんと14歳で東京開成学校（東大）に入った天心は政治学・理財学などを学びます。そんな時にハーバード大学から**お雇い外国人教師**として来日した**アーネスト・フェノロサ**と出会い、早々に英語力を認められて通訳として重宝がられました。さらに、18歳で結婚もします。

実は天心にとって、転機となる出来事が2つ起こります。

1つめ。天心は卒業論文に「国家論」を書いたそうです。ところが、若妻が「自分勝手な」天心に「ヒステリー」をおこして、これを燃やしちゃうのです。天心はやむなく、わずか二週間で「美術論」で間に合わせたのです。このことを知ったフェノロサは天心の美術に関する知識にたいそう驚きます。

2つめ。卒業して文部省の音楽取調掛に就職しますが、翌年にアメリカから帰国した**伊沢修二**とソリが合わず、内記課に移ったのです。

ここで問題です。**伊沢修二**といえば、**学校教育に西洋の歌謡を模倣した唱歌を導入した人物として有名です。1887年に設立され、彼が初代校長を務めた現在の東京藝術大学の**

前身である学校は何ですか？

そう、**東京音楽学校**でした。彼は台湾での植民地教育や楽石社を結成しての吃音（きつおん）矯正に尽力したことで有名です。

話を元に戻しましょう。上記の2つの偶然が天心をフェノロサの美術品収集を手伝ったり、美術調査に随行させることになったと言ってもよいでしょう。もし、「国家論」が卒業論文に通っていたら、そして伊沢修二とうまいこといってたら、その後の岡倉天心の業績は生まれなかったかもしれません。何が人生を変えるかわかりませんね。

1884年6月、フェノロサとともに京阪地方の古社寺歴訪を命じられ、出張中に**法隆寺夢殿**を開扉、**救世観音菩薩像**を調査したことは有名です。

なかでも千年の眠りから覚めた夢殿観音との逢着はフェノロサよりも天心を決定的に「東洋の夢」に走らせたようです。

1886年 - 1887年、東京美術学校設立のため、フェノロサと欧米視察旅行に向かいました。1887年、東京美術学校幹事に就任。**東京美術学校**は1889年に開校しました（現・東京藝術大学美術学部）。

1890年10月、東京美術学校の初代校長に天心が就任（副校長はフェノロサです）。この時、天心は27歳で校長になっているんです。同校での美術教育が特に有名で、**横山大観**、**下村観山**、**菱田春草**らを育てたことで知られます。

ところが、1898年、スキャンダルにより東京美術学校を排斥され辞職します。同時に、連帯辞職した横山大観らを連れ、**日本美術院**を下谷区谷中に発足させました。1904年、アメリカボストン美術館中国・日本美術部に迎えられ、1910年、同部の部長に就任します。1913年病のため50歳で亡くなりました。

なお、彼が英語で書いた著作は以下の通りです。

- ①『The Ideals of the East, with special reference to the art of Japan』
1903年、ジョン・マレー書店（ロンドン）『**東洋の理想**』
- ②『The Awakening of Japan』 1904年 センチュリー会社（英語版）（ニューヨーク）及びジョン・マレー社（ロンドン）『**日本の目覚め**』
- ③『The Book of Tea』 1906年 フォックス・ダフィールド社（ニューヨーク）
『**茶の本**』

仏像を蘇らせた岡倉天心

これまで述べてきたように、明治初めの日本では「神仏分離」や「廃仏毀釈」の嵐が吹き荒れる中で、経典が商品の包み紙にされたり、仏像が薪としてたたき割られたり燃やされたり、貴重な文化財が失われてしまいました。奈良興福寺の五重塔も売りに出されまし

た。古都は破壊されてしまっていました。

その荒廃ぶりを見た天心は、その後10年間に21万件もの仏像や文化財を調査、文化財保護の法律を訴えるなどしてその保護に力を尽くすこととなります。その過程で1897(明治30)年に**古社寺保存法**が制定されました。

建造物の場合は、法起寺三重塔、東大寺大仏殿や唐招提寺金堂などの修理を通じて建造物修理の基本的な考え方が確立します。

仏像彫刻については、岡倉天心を中心に結成された日本美術院に源を発する財団法人美術院がほとんどの仏像彫刻の修理にかかわっています。

天心は弟子達と「仏像の修理をやり抜こう」と宣言し、**東大寺法華堂不空羂索(ふくうけんじゃく)観音像**の修復に挑みます。その当時の観音像は衣部分がバラバラになり、付き添う月光菩薩像は手が欠け、足元の餓鬼は頭が欠けていたといえます。

ちなみに、東大寺法華堂の建物の修理は1901年春から始まり、堂内の仏像修理は同年11月から始まりました。修理の期間は2年です。岡倉天心が総監督、副監督が彫刻「老猿」で有名な**高村光雲**、主任(実質的責任者)が新納忠之介でした。

私がすごいと思うのは、壊された仏像を天心や弟子たちが修理していったことです。しかも、修理といっても壊れた部分を適当に付け足したり、はげ落ちた色を勝手に今のペンキで仕上げたりするわけにはいきません。

なぜなら、「仏像は部分が欠けていると信仰の対象となりにくい、かと言って闇雲な修理をすれば美術品としての価値を損なう」からです。「直したいけど、直してはいけない」部分があるのです。

天心たち以前はどうやって「修理」していたのでしょうか？

仏像に欠けている部分があった場合、それまでは、かなり適当に別の部材を持ってきてくっつけたり、仏像本体を削ったりしていました。信仰の対象としてはそれでいいかもしれませんが、美術品としては価値が大いに減じてしまいます。

悩んだ末に、天心たちは「**現状維持修理**」という方法に行き着きます。

この方法は、**本体をこれ以上傷つけないように保持する**ことを目的とし、部分が欠けていて信仰の対象となりにくい時には取り外しできるパーツを作って仮留めで補修復元する方法です。こういうやり方を「現状維持修理法」と言います。

天心は信頼する弟子の新納忠之介に、月光菩薩の指の形を調査させて、日光菩薩の指の部分を作成させます。餓鬼の部分も他の像の餓鬼を参照に粘土でくっつけ、さらに観音像の衣部分も足りない部分を作って付け足しました。こうして本体を傷つけずに、信仰と美術の両面を兼ねた修復が終わります。

その後も東大寺の四天王像や興福寺の阿修羅像など、2000体の修復を行ったのです。私も幾度か不空羂索観音像をお参りしたことがありますが、その大きさや輝きなどに圧倒されます。少年のようで少女のようでもある阿修羅像には5、6年に一度、お顔を拝ませてもらっています。



興福寺阿修羅像



東大寺法華堂不空羂索観音像
像高は362cm、台座から光背までは6m
(写真はともに「ウィペディア」より)

きちんと修理していただいたから現代の私たちが仏像を拝めるのです。廃仏毀釈の後、ほったらかされていたら仏像はどうなっていたでしょうか？それを考えると恐ろしくなります。

上記のように、天心や弟子たちによって確立された彫刻修理の方針や修理技術が確立していったのです。そして、「現状維持修理法」により、仏像は民衆の信仰の対象となり、さらに現代のすぐれた修復技術によって、沢山の仏像が「完璧」に蘇ったのです。

日本美術の恩人：フェノロサ

一方、岡倉天心の師匠ともいべき人物がアーネスト・フランシスコ・フェノロサです。彼はアメリカ合衆国の東洋美術史家、哲学者で、明治時代に来日したお雇い外国人です。日本の仏像や絵画など美術品を高く評価し、海外に紹介したことで知られる人物です。

先に来日していた動物学者モースの紹介で1878年、25歳で来日し、東京大学で哲学、政治学、理財学（経済学）などを教えました。フェノロサの講義を受けた者には天心以外

に**嘉納治五郎**、**井上哲次郎**、**高田早苗**、**坪内逍遙**らがいるそうです。

フェノロサの専門は政治学や哲学であり、美術が専門ではありませんでしたが、来日後は日本美術に深い関心を寄せ、助手の岡倉天心とともに古寺の美術品を訪ね、天心とともに東京美術学校の設立に尽力することになります。

フェノロサは1882年の第1回内国絵画共進会で審査官を務めました。狩野芳崖の遺作の『悲母観音像』は、フェノロサの指導で、唐代仏画のモチーフに近代様式を加味して制作したものだそうです。



フェノロサ



狩野芳崖
『悲母観音』

フェノロサは当時の日本の美術行政、文化財保護行政にも深く関わりました。1880年と1882年に京都・奈良の古社寺を訪問しています。1884年には文部省図画調査会委員に任命され、同年には岡倉天心らに同行して近畿地方の古社寺宝物調査を行っています。この時に、法隆寺夢殿の秘仏・救世観音像を開扉したのは有名ですね。

これは大変なことでした。なにせ、法隆寺創建以来、絶対に開けてはならないとされていた夢殿の扉をフェノロサが開かせたからです。布で数百メートルもぐるぐる巻きにされていた救世観音像（これは等身大の聖徳太子像だと言われています）がありました。布をすべてほどくと観音像の神々しいばかりに美しい姿が目の前にあらわれたといいます。

翌年、フェノロサは琵琶湖のほとりにある三井寺で法名を授かり、なんとキリシタンから仏教徒に改宗します。

1890年に帰国し、ボストン美術館東洋部長として日本美術の紹介を行います。1908年、ロンドンの大英博物館で調査をしているときに心臓発作で逝去。英国国教会の手でハイゲート墓地に埋葬されましたが、フェノロサの遺志により、火葬ののち分骨されて日本に送られ、**大津の法明院**に改めて葬られました。

廃仏毀釈を経て、また西洋文化崇拜の時代風潮の中で、「日本の美術は西洋美術になん

らひけをとらない。むしろこの簡潔さの美を誇りに思うべきだ」「西洋美術は小手先の技巧に走ってしまっている感がある。日本には日本にしかない芸術がある」などと熱弁をふるいました。

彼は、見捨てられていた日本の美術を高く評価し、研究を進め、広く海外に紹介した点は日本美術にとっての恩人ともいえ、高く評価されて当然の人物だと思えます。

『ウィキペディア』での彼の評価は以下の通りです。

フェノロサが参加した古社寺の宝物調査は、文化財保護法の前身である古社寺保存法の制定（1897年）への道を開いたものであり、東京藝術大学の前身の1つである東京美術学校の開校にも関わるなど、明治時代における日本の美術研究、美術教育、伝統美術の振興、文化財保護行政などにフェノロサの果たした役割は大きい。また「国宝」(national treasures) の概念は彼が考えた。

一方、『平治物語絵巻』、尾形光琳筆『松島図』(ともにボストン美術館所蔵)など国宝級の美術品を海外に流出させたとして批判を受けることも多い。また一方で、海外において認知されたことで、美術品として更なる評価を受けたともされている。

日本の絵画を外国へ「持ち出した」ということでフェノロサを批判する人がいますが、もし彼が持ち出さなかったら、これらの作品は別の誰かが海外に安値で持ち出したり、作品の価値がわからない誰かによって処分されていたかもしれません。

ですから、私は「持ち出した」人物がフェノロサで良かったと思っています。

さて、4回にわたって**鶴飼秀徳氏の『仏教抹殺』**から学んだことについて述べてきました。

一言でいえば、バーミヤンの摩崖仏破壊の日本版ともいうべき破壊行為である「廃仏毀釈」の目的や実態、問題点などを書き連ねてきました。ほんとに「仏教抹殺」という状況でした。1000年以上もの歴史伝統のある「神仏習合」が破壊されました。でも、ほとんどの場所では、不思議に数年で収まりました。でも、破壊された建物や仏像は戻ってきません。海外に流れ出たものも沢山あります。でも、残存しているのが救いです。

筆者の読み込みが浅くて、わかりにくかったところもあると思いますが、ご容赦ください。また、「神社合祀」や「岡倉天心・フェノロサ」「仏像修理」に関しては、WEB記事を参考にさせていただきました。ありがとうございます。

今回もお読みいただき、ありがとうございました。